陸甲第二〇號

起案 昭和十一年七月十五日

裁可 昭和十一年七月十五日

決定 昭和十一年七月十六日

施行 公布 昭和十一年七月十七日 號外

内閣總理大臣

内閣書記官長

内閣書記官

外務大臣	陸軍大臣	遞信大臣	
内務大臣	海軍大臣	鐵道大臣	
大藏大臣	司法大臣	拓務大臣	
	文部大臣		
	農林大臣		
	商工大臣		

昭和十一年勅令第十八號一定ノ地域ニ
戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スル

ノ件廢止ノ件

右樞密院ノ御諮詢ヲ經テ御下付ニ付
同院上奏ノ通裁可ヲ奏請セラレ可然
ト認ム

臣等昭和十一年勅令第十八號一定ノ地域
ニ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ件廢
止ノ件諮詢ノ命ヲ恪ミ本月十五日ヲ以テ
審議ヲ盡シ之ヲ可決セリ乃チ謹テ上奏シ
更ニ
聖明ノ採擇ヲ仰ク

昭和十一年七月十五日

樞密院議長男爵臣平沼騏一郎

朕茲ニ緊急ノ必要アリト認メ樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ帝國憲法第八條第一項ニ依リ昭和十一年勅令第十八號一定ノ地域ニ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ件廢止ノ件ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

国立公文書館
National Archives of Japan

御名御璽

昭和十一年七月十七日

内閣總理大臣

各省大臣

勅令第百八十九號

昭和十一年勅令第十八號ハ之ヲ廢止ス

附則

本令ハ公布ノ日ノ翌日ヨリ之ヲ施行ス

国立公文書館
National Archives of Japan

奏甲二〇

御覽濟 内閣へ御下付

書記官長

内閣書記官

昭和十一年七月十七日號外
昭和十一年七月十日御下付

内閣總理大臣

外務大臣	陸軍大臣
内務大臣	海軍大臣
大藏大臣	司法大臣
文部大臣	遞信大臣
農林大臣	鐵道大臣
商工大臣	拓務大臣

法制局長官

別紙陸軍大臣請議昭和十一年勅令第十八號、同第十九號及戒嚴司令部令廢止ノ件ヲ審査スルニ右ハ相當ノ儀ト思考ス依テ請議ノ

法制局

相密院

通閣議決定セラレ可然ト認ム

追テ昭和十一年勅令第十八號廢止ノ件ハ帝國憲法第八條ノ勅令ナルヲ以テ樞密院官制第六條ニ依リ樞密院ニ御諮詢相成可然ト認ム

勅令案

呈案附箋ノ通

法制局

陸普第四一六六號

昭和十一年勅令第十八號、同第十九號及戒嚴司令部令廢止ノ件

昭和十一年七月八日

陸軍大臣伯爵寺内壽一

内閣總理大臣廣田弘毅殿

昭和十一年勅令第十八號、同第十九號及戒嚴司令部令廢止ノ件別紙勅令案ノ通制定相成度理由書ヲ具シ閣議ヲ請フ

陸軍

国立公文書館
National Archives of Japan

朕茲ニ緊急ノ必要アリト認メ樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ帝國憲法第八條第一項ニ依リ昭和十一年勅令第十八號一定ノ地域ニ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ件廢止ノ件ヲ裁可シ、之ヲ公布セシム

御名御璽

昭和　年　月　日

内閣總理大臣

各省大臣

勅令第　號

昭和十一年勅令第十八號ハ之ヲ廢止ス

附則

本令ハ公布ノ日ノ翌日ヨリ之ヲ施行ス

付案

主任者

陸軍省軍事課　山崎大尉

理由書

昭和十一年二月二十六日事件ノ勃發ニ因リ治安維持ノ爲一定ノ地域ヲ限リ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ件ノ公布ヲ見タルモ斯ル戒嚴ハ情勢ノ許ス限リ速ニ之ヲ解消セシムベキハ言フヲ待タザル所ニシテ今ヤ右反亂事件ノ被告人中其ノ直接關係者ニ對スル刑ノ言渡モ終リ民心略安定シ治安上ノ不安薄ラギタルヲ以テ依然其ノ施行ヲ繼續スルガ如キハ反ツテ公安上害ナシトセザルニヨリ茲ニ之ヲ廢止セントス

朕昭和十一年勅令第十九號昭和十一年勅令第十八號ノ施行ニ關スル件廢止ノ件ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

昭和十一年七月十七日

内閣總理大臣

陸軍大臣

勅令第百九十號

昭和十一年勅令第十九號ハ之ヲ廢止ス

附則

本令ハ公布ノ日ノ翌日ヨリ之ヲ施行ス

理由書

昭和十一年勅令第十八號廢止ニ伴ヒ之ヲ廢止スルノ必要アルニ由ル

陸軍

国立公文書館
National Archives of Japan

朕戒嚴司令部令廢止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

昭和十一年七月十七日

内閣總理大臣

陸軍大臣

勅令第百九十一號

戒嚴司令部令ハ之ヲ廢止ス

附則

本令ハ公布ノ日ノ翌日ヨリ之ヲ施行ス

理由書

昭和十一年勅令第十八號及昭和十一年勅令第十九號廢止ニ伴ヒ之ヲ廢止スル要アルニ由ル

国立公文書館
National Archives of Japan

参照

朕茲ニ緊急ノ必要アリト認メ樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ帝國憲法第八條第一項ニ依リ一定ノ地域ニ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ件ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

御名　御璽

昭和十一年二月二十七日

内閣總理大臣臨時代理　内務大臣　後藤文夫
内務大臣　後藤文夫
海軍大臣　男爵　大角岑生
外務大臣　廣田弘毅
司法大臣　小原直
商工大臣　町田忠治
農林大臣　山崎達之輔
鐵道大臣　内田信也
拓務大臣　伯爵　兒玉秀雄
陸軍大臣　川島義之
遞信大臣　望月圭介
文部大臣　川崎卓吉

勅令第十八號

一定ノ地域ヲ限リ別ニ勅令ノ定ムル所ニ依リ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

參照

朕昭和十一年勅令第十八號ノ施行ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

昭和十一年二月二十七日

内閣總理大臣臨時代理
内務大臣　後藤文夫
陸軍大臣　川島義之

勅令第十九號

昭和十一年勅令第十八號ニ依リ左ノ區域ニ戒嚴令第九條及第十四條ノ規定ヲ適用ス

一　東京市

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

牛紙罫紙（十行全）（日井納）

国立公文書館
National Archives of Japan

参照

朕戒嚴司令部令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

昭和十一年二月二十七日

内閣總理大臣臨時代理
内務大臣　後藤　文夫
陸軍大臣　川島　義之

勅令第二十號

戒嚴司令部令

第一條　戒嚴司令官ハ陸軍大將又ハ中將ヲ以テ之ニ親補シ天皇ニ直隷シ東京市ノ警備ニ任ズ

戒嚴司令官ハ其ノ任務達成ノ爲前項ノ區域内ニ在ル陸軍軍隊ヲ指揮ス

第二條　戒嚴司令官ハ軍政及人事ニ關シテハ陸軍大臣ノ區處ヲ承ク

第三條　戒嚴司令部ニ左ノ職員ヲ置ク

參謀長
參謀
副官
管理部長
經理部長
軍醫部長
部附
部員
衛兵長
憲兵長

准士官、下士官、判任文官

第四條　參謀長ハ戒嚴司令官ヲ輔佐シ事務整理ノ責ニ任ズ

第五條　參謀ハ參謀長ノ指揮ヲ承ケ各擔任ノ事務ヲ掌ル

第六條　副官ハ參謀長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ掌ル

内閣

半紙罫紙（十行仝）（白井納）

第七條　管理部長、經理部長、軍醫部長ハ戒嚴司令官ノ命ヲ承ケ各擔任ノ事務ヲ掌理ス

第八條　部附、部員、衛兵長、憲兵長ハ各上官ノ命ヲ承ケ事務ヲ掌ル

第九條　准士官、下士官、判任文官ハ各上官ノ命ヲ承ケ事務ニ從事ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

當分ノ内東京市内ニ於ケル東京警備司令官ノ職務ハ之ヲ停止ス

内閣

半紙罫紙（十行全）（白井納）

参照

朕茲ニ緊急ノ必要アリト認メ樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ帝國憲法第八條ニ依リ明治二十七年勅令第百三十四號廢止ノ件ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

御名　御璽

明治二十七年九月十二日

内閣總理大臣

各省大臣

勅令第百六十七號

明治二十七年勅令第百三十四號ハ本令發布ノ日ヨリ

内閣

国立公文書館
National Archives of Japan

之ヲ廢止ス

内閣

半紙罫紙（十行全）（白井納）

参照

朕茲ニ緊急ノ必要アリト認メ樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ帝國憲法第八條ニ依リ軍事郵便物ニ關スル件ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

御名御璽

明治三十七年二月五日

内閣總理大臣兼内務大臣 伯爵 桂太郎

海軍大臣 男爵 山本權兵衛

農商務大臣 男爵 清浦奎吾

大藏大臣 男爵 曾禰荒助

内閣

外務大臣 男爵 小村壽太郎
陸軍大臣 寺内正毅
司法大臣 波多野敬直
遞信大臣 大浦兼武
文部大臣 久保田讓

勅令第十九號

第一條 軍事郵便ノ取扱ヲ開始シタル場合ニ於テハ左ニ掲クルモノヲ軍事郵便物ト爲スコトヲ得

一 戰時又ハ事變ニ際シ戰地若ハ之ニ准スヘキ地ニ在リ又ハ該地ニ派遣スルル軍隊、軍艦、水雷艇、軍衙、軍人又ハ軍屬ヨリ發スル郵便物

二 戰時又ハ事變ニ際シ戰地又ハ之ニ准スヘキ地ニ在ル者ニシテ當該軍衙ノ許可ヲ得タル者ヨリ發スル郵便物

三 前二號ニ掲クル者ニ宛テ發スル郵便物

第二條 前條第一號及第二號ニ依ル軍事郵便物ハ其ノ料金ヲ免除ス

第三條 第一條第三號ニ依ル軍事郵便物ハ料金完納ノモノニ限ル其ノ料金未納

又ハ不足ノモノハ差出人ニ還付シ不納額ノ二倍ヲ徴收ス

第四條　軍事郵便物ニ關シテハ命令ヲ以テ制限ヲ設クルコトヲ得

第五條　軍事郵便物取扱ニ關スル損害賠償ハ命令ヲ以テ之ヲ制限スルコトヲ得

第六條　條約ニ依リテ取扱フ郵便物ニハ第二條乃至第五條ヲ適用セス

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治二十七年勅令第六十七號ハ之ヲ廢止ス

参照

朕茲ニ緊急ノ必要アリト認メ樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ帝國憲法第八條ニ依リ明治三十八年勅令第二百九號及同年勅令第二百六號廢止ノ件ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

御名　御璽

明治三十八年十一月二十九日

内閣總理大臣

各省大臣

勅令第二百四十二號

明治三十八年勅令第二百五號及同年勅令第二百六號ハ本令發布ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

半紙罫紙（十行全）（日井納）

參照

朕茲ニ緊急ノ必要アリト認メ樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ帝國憲法第八條第一項ニ依リ大正十二年勅令第三百九十八號一定ノ地域ニ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ件廢止ノ件ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

御名御璽

攝政名

大正十二年十一月十五日

内閣總理大臣

各省大臣

城戸 11.7.9

国立公文書館 National Archives of Japan

勅令第四百七十八號

大正十二年勅令第三百九十八號ハ之ヲ廢止ス

附則

本令ハ公布ノ日ノ翌日ヨリ之ヲ施行ス

日本標準規格B4判（二行全）（木村綴）

一昭和十一年勅令第十八號一定ノ地域ニ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ件廢止ノ件

右別紙ノ通本院ニ於テ決議上奏候條此段及通牒候也

昭和十一年七月十五日

樞密院議長男爵平沼騏一郎

内閣總理大臣廣田弘毅殿

臣等昭和十一年勅令第十八號一定ノ地域ニ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ件廢止ノ件諮詢ノ命ヲ恪ミ本月十五日ヲ以テ審議ヲ盡シ之ヲ可決セリ乃チ謹テ上奏シ更ニ聖明ノ採擇ヲ仰ク

昭和十一年七月十五日

樞密院議長男爵臣平沼騏一郎

国立公文書館
National Archives of Japan

朕茲ニ緊急ノ必要アリト認メ樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ帝國憲法第八條第一項ニ依リ昭和十一年勅令第十八號一定ノ地域ニ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ件廢止ノ件ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

御名　御璽

年　月　日

内閣總理大臣
各省大臣

勅令第　號

昭和十一年勅令第十八號ハ之ヲ廢止ス

附則

本令ハ公布ノ日ノ翌日ヨリ之ヲ施行ス

国立公文書館
National Archives of Japan

（昭和十二年十一月五日添附）

祕

昭和十一年勅令第十八號一定ノ地域ニ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ件廢止ノ件審査報告

今回御諮詢ノ昭和十一年勅令第十八號一定ノ地域ニ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ件廢止ノ件ニ付本官等審査委員ヲ命ゼラレ本月十三日委員會ヲ開キ當局、大臣及關係諸官ノ説明ヲ聽キ以テ之ガ査覈ヲ遂ゲタリ

本年二月二十六日東京ニ重大事件勃發スルヤ之ニ對スル應急措置トシテ翌二十七日本院ノ

御諮詢ヲ經タル帝國憲法第八條第一項ニ依ル緊急勅令（昭和十一年勅令第十八號）ヲ以テ一定ノ地域ヲ限リ別ニ勅令ノ定ムル所ニ依リ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルコトヲ得ル旨ヲ定メラレ同日別ノ勅令ヲ以テ東京市ニ戒嚴令第九條及第十四條ノ規定ヲ適用スル旨ヲ定メラレ戒嚴司令部令ヲ以テ戒嚴司令部ヲ設置セラレタリ乃チ戒嚴司令官ハ軍隊及地方官憲ヲ指揮シ戒嚴令第十四條各號ニ掲ゲタル諸件ヲ必要ニ應ジテ適宜執行シ以テ帝都治安ノ恢復及維持ニ努メタリ其ノ間第六十九回帝國議會開會セラレ政府ハ右緊急勅令ヲ之ニ提出シテ其ノ承諾ヲ得タリ今當局ノ説明ニ依レバ事件勃發以來叛亂ノ鎮定ニ伴ヒ表面ハ治安ハ速ニ恢復セラレタルモ事件ノ關係範圍廣汎ニシテ關係者ノ檢擧取調ニ豫想外ノ長時日ヲ要シタルノミナラズ一般人心ノ安定未ダ必ズシモ充分ナラズ動モスレバ流言蜚語ノ行ハルルアリ事件直接參加者ニ對スル公判ノ前後ニ於テ人心ノ動搖ナキヲ保セズ其ノ機ニ乘ジテ詭激分子ノ策動スルモ

ノナキヲ心シ難クシテ事件直接参加者ノ裁判確定前ニハ右緊急勅令ヲ廢止スベカラザル情勢ニ在リタリ尤モ當局ニ於テハ狀況ニ應ジテ逐次特別ノ措置ヲ緩和シ漸ヲ追ウテ常態ニ復スルニ努メタリ然ルニ最近ニ於テ事件直接参加者ニ對スル判決ハ既ニ其ノ言渡ヲ了シ事件背後關係者ノ取調モ亦概ネ之ヲ盡シ其ノ關係者ハ之ヲ陸軍法會議ニ送致スルニ至リ其ノ間人心ノ動搖、詭激分子ノ策動ノ特ニ注目スベキモノナク今ヤ右緊急勅令ヲ存置スルノ要ナキコトト爲レリ而カモ尚之ヲ其ノ儘存置スルニ於テハ徒ニ世間ノ疑惑ヲ招キ却テ民心ノ不安ヲ來スノ虞ナシトセズ乃チ當局ニ於テハ此ノ際之ヲ廢止スルノ緊急ノ必要アリト認メ茲ニ本件ノ帝國憲法第八條第一項ニ依ル緊急勅令ヲ以テ該勅令ヲ廢止セントスルナリ

前掲ノ緊急勅令ヲ廢シテ戒嚴令中ノ規定ノ適用ヲ止メタル後ニ在リテモ當局ニ於テハ憲兵ヲ增員シ警察力ヲ充實シ殊ニ陸軍警備機關ト通常警察機關トノ連絡ヲ緊密ナラシメ其ノ他

適切ナル處置ヲ講シテ治安ノ維持ニ萬遺憾ナキヲ期スベキ旨ヲ言明シタリ

按ズルニ本件ハ這般ノ重大事件ニ對スル非常措置トシテ戒嚴令中ノ規定ノ適用ノ爲メ制定セラレタル緊急勅令ガ今ヤ之ヲ存置スルノ要ナク寧ロ此ノ際之ヲ消滅セシムルノ要アルニ至リタルノ故ヲ以テ茲ニ之ヲ廢止セントスルモノニシテ當局ノ言明ノ如ク之ガ廢止後ト雖治安ノ維持ニ遺漏ナキコトノ期待セラルルニ於テハ之ヲ廢止スルモ別ニ支障ナシト認ムベキニ由リ審査委員會ニ於テハ右當局ノ言明ヲ信賴シ本件ハ此ノ儘之ヲ可決セラレ然ルベキ旨全會一致ヲ以テ議決シタリ

右審査ノ結果ヲ報告ス

昭和十一年七月十四日

審査委員長
樞密顧問官　河合　操
審査委員
樞密顧問官　有馬　良橘
樞密顧問官　原　嘉道

樞密顧問官　窪田静太郎
樞密顧問官　元田　肇
樞密顧問官　鈴木　莊六
樞密顧問官　石塚　英藏
樞密顧問官　清水　澄
樞密顧問官　上山滿之進

樞密院議長男爵平沼騏一郎殿

内閣總理大臣

（昭和十二年十一月五日奉附）

昭和十一年七月十五日會議議案

秘

昭和十一年勅令第十八號一定ノ地域ニ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ件廢止ノ件

參照添附

朕茲ニ緊急ノ必要アリト認メ樞密顧問
ノ諮詢ヲ經テ帝國憲法第八條第一項ニ
依リ昭和十一年勅令第十八號一定ノ地
域ニ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ
件廢止ノ件ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

御名　御璽

年　月　日

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣總理大臣
各省大臣

勅令第　號

昭和十一年勅令第十八號ハ之ヲ廢止ス

附則

本令ハ公布ノ日ノ翌日ヨリ之ヲ施行ス

国立公文書館
National Archives of Japan

朕茲ニ緊急ノ必要アリト認メ樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ帝國憲法第八條第一項ニ依リ一定ノ地域ニ戒嚴令ヲ必要ノ規定ヲ適用スル件ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

御名　御璽

昭和十一年二月二十七日

内閣總理大臣

各省大臣

勅令第十八號

一定ノ地域ヲ限リ別ニ勅令ノ定ムル所ニ依リ

戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○昭和十一年勅令第十九號廢止勅令

勅令第　號

昭和十一年勅令第十九號ハ之ヲ廢止ス

附則

本令ハ公布ノ日ノ翌日ヨリ之ヲ施行ス

○昭和十一年勅令第十八號ノ施行ニ關スル件（昭和九年勅令第十一號ノ一部ヲ改ム）

昭和十一年勅令第十八號ニ依リ左ノ區域ニ戒嚴令第九條及第十四條ノ規定ヲ適用ス

東京市

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○戒嚴令（明治十五年太政官布告第三十六號）第九條　臨戰地境内ニ於テハ地方行政事務及

ト司法事務ノ軍事ニ關係アル事件ヲ限リ其
地ノ司令官ニ管掌ノ權ヲ委スル者トス故ニ
地方官地方裁判官及ヒ檢察官ハ其戒嚴ノ布
告若クハ宣告アル時ハ速カニ該司令官ニ就
テ其指揮ヲ請フヲ可シ

第十四條　戒嚴地境内ニ於テハ司令官左ニ記
列ノ諸件ヲ執行スルノ權ヲ有ス但其執行ニ
リ生スル損害ハ要償スルヲ得ス

第一　集會若クハ新聞雜誌廣告等ノ時勢ニ
妨害アリト認ムル者ヲ停止スルヲ

第二　軍需ニ供スヘキ民有ノ諸物品ヲ調査
シ又ハ時機ニ依リ其輸出ヲ禁止スルヲ

第三　銃砲彈藥及器械其他危險ニ渉ル諸
物品ヲ所有スル者アル時ハ之ヲ檢査シ時
機ニ依リ押收スルヲ

第四　郵信電報ヲ開緘シ出入ノ船舶及ヒ諸
物品ヲ檢査シ並ヘ陸海通路ヲ停止スルヲ

第五　戰狀ニ依リ止ムヲ得サル場合ニ於テ
人民ノ動産不動産ヲ破壞燬燒スルヲ

第六　戒嚴地境内ニ於テハ晝夜ノ別ナク人

民ノ家屋建造物船舶中ニ立入リ檢察スル

「

第七　合圍地境内ニ寄宿スル者アル時ハ時機ニ依リ其地ヲ退去セシムル「

○戒嚴司令部令廢止勅令案

勅令第　號

戒嚴司令部令ハ之ヲ廢止ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○戒嚴司令部令（昭和十一年勅令第二十號）

第一條　戒嚴司令官ハ陸軍大將又ハ中將ヲ以テ之ニ親補シ天皇ニ直隸シ東京市ノ警備ニ任ズ

戒嚴司令官ハ其ノ任務達成ノ爲前項ノ區域内ニ在ル陸軍軍隊ヲ指揮ス

第二條　戒嚴司令官ハ軍政及人事ニ關シテハ陸軍大臣ノ區處ヲ承ク

第三條　戒嚴司令部ニ左ノ職員ヲ置ク

參謀長

参謀
副官
管理部長
經理部長
軍醫部長
部附
部員
衛兵長
憲兵長
准士官、下士官、判任文官

第四條　参謀長ハ戒嚴司令官ノ輔佐ヒ事務整
理ノ責ニ任ス
第五條　参謀ハ参謀長ノ指揮ヲ承ケ各擔任ノ
事務ヲ掌ル
第六條　副官ハ参謀長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ掌
ル
第七條　管理部長、經理部長、軍醫部長ハ戒嚴司
令官ノ命ヲ承ケ各擔任ノ事務ヲ掌理ス
第八條　部附、部員、衛兵長、憲兵長ハ各上官ノ命
ヲ承ケ事務ヲ掌ル

第九條　准士官、下士官、判任文官ハ各上官ノ命ヲ承ケ事務ニ從事ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

當分ノ内東京市内ニ於ケル東京警備司令官ノ職務ハ之ヲ停止ス

參照

極秘

戒嚴ニ從事セル兵力一覽表

月日 / 區分	東京常駐兵力	東京以外ヨリ增加セシ兵力	
二月二十六日	GD		
二月二十七日	1D	1,000	
二月二十八日	甚	1,800	
二月二十九日	計	12,600	
三月五日	GD	100	
	1D	3,100	
	2D	2,000	
	14D	1,400	4,500
	學校		1,700
	計	6,600	11,400	9,600
	合計	19,200	24,000	22,200

参照

極秘

戒嚴ニ從事セル兵力一覽表

區分	月日	二月二十六日	二月二十七日	二月二十八日	二月二十九日	三月五日	三月十六日	三月三十日	四月六日	四月七日	五月十五日	六月五日	六月二十日	現在
東京常駐兵力	GD	6,800												
	1D	4,000											1,300	
	基地	1,800							1200		900			
	計	12,600							12,000		11,700			9,000
東京以外ヨリ增加セシ兵力	GD	100												
	1D	3,100						500						
	2D	2,000							1,400		500			
	14D	4,500	1,400				1,500						500	
	學校	1,700												
	計	11,400	6,600	9,600	4,000	1,900		1,400		500	1,000	500		
	合計	24,000	19,200	22,200	16,600	13,900	13,400	13,100		9,500	10,000	12,200		

備考

一本表ノ外海軍陸戰隊ヲ以テ事件當時約二千名三月下旬ヨリ六月末ニ亘リ約二百名海軍關係官廳、宮邸等ノ警備ニ服セリ

参照

戒嚴令中適用條項實施ノ狀況

要旨	制限、禁止事項	月日	事項
一、戒嚴令第九條適用ニ依ル司法、行政事務ノ指揮ハ憲兵司令官、警視總監、東京府知事、關係各裁判所長、東京控訴院檢事長、東京鉄道局長及東京逓信局長ニ對シ夫々平素ノ業務系統及事務分擔ニ依リ服務スルコトヲ基調トセル一般的任務ヲ課シ所要ニ應シ臨機ノ命令ヲ發シテ指揮シアリ 二、禁止及停止條項ハ二月二十八日ニ於テ戒嚴令第十四條全部ニ達シタルモ爾後治安ノ安定ニ伴ヒ漸次之ヲ緩和セリ		二月二十七日	戒嚴令第十四條第一、第三、第四號ヲ適用シ集會及時勢ニ妨害アリト認ムル新聞雜誌廣告等並ニ銃砲彈藥兵器ノ賣買讓渡ヲ禁止又必要ト認ムル郵便物ノ開緘檢閲ヲ行フ
		二月二十八日	戒嚴令第十四條全部適用
		二月二十九日	二月二十七日ニ全シ
		三月二十日	治安警察法第二條及第四條ニ依リ屆出ヲ必要トスル集會及二、二六事件ニ關シ講談論議スルモノヲ除ク外集會ヲ解除ス
		三月三十日	拳銃及軍用銃並ニ之ニ伴フ實包、空包ヲ除ク外賣買讓渡ノ解除
		四月十三日	配屬將校服務學校ニ對スル場合ニ限リ小銃實包(空包)拂下解除
		四月二十日	議員選擧運動ノ爲ニ會同スル集會ノ解除
		四月二十七日	拳銃及軍用銃ニ對スル空包及製造試驗ニ必要ナル實包ノ拂下解除
		四月二十九日	天長節ニ當リ奉祝ノ爲慣例アル集會ハ當日限リ解除
		五月二十日	競技會信號用トシテ使用スル拳銃解除
		五月二十三日	學校教練用軍用銃拂下解除
		六月一日	治安警察法第二條ニ依リ屆出ヲ必要トスル集會解除
		六月十五日	治安警察法第四條ニ依リ屆出ヲ必要トスル集會解除
		七月六日	東京衛戍刑務所上空ノ飛行禁止

参照

現在ニ於ケル戒嚴令中適用條項ノ狀況（昭和十年七月十三日現在）

一、集會

二、二六事件ニ關シ講談論議スルモノ其ノ他治安ニ害アリト認ムルモノヲ禁止ス

二、新聞、雜誌、廣告等

時勢ニ妨害アリト認ムルモノヲ禁止ス

三、拳銃、軍用銃（鎗刀ヲモ共）

軍裝品及學校教練用等ニテ特ニ許可スルモノヲ除キ賣買ヲ禁止ス

四、郵便、電報

五、航空

治安上必要ナルモノニ限リ開緘檢閲ヲ實施ス

東京衛戍刑務所上空ノ飛行ヲ禁止ス

極秘

参照

東京陸軍軍法會議取調人員一覽表　七月十日現在

身分＼處理區分	起訴			不起訴	豫審	檢察	移送	計
	判決	公判	計					
反亂當時 現役將校	一九	六	二五	(三)三	二二	七		六〇
同 在鄉將校	一		一		三	六		一〇
同 現役見習醫官				(三)				三
同 現役准士官	二		二					二
同 現役下士官	七三		七三	(一六)				八九
同 現役兵	二〇		二〇	一、三三九				一、三五九
同 常人	八		八		二三	二三	五	五九
計	一二三	六	一、三六四 (二二)		四八	三六	五	一、五八二

備考　一、起訴人員全部及不起訴人員中ノ括弧ヲ附シタルモノハ豫審ヲ經タル人員トス

内閣

内閣總理大臣内奏

本日上奏致シマス三勅令案ハ

(一)昭和十一年勅令第十八號（一定ノ地域ニ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ件）廢止ノ件

(二)昭和十一年勅令第十九號（昭和十一年勅令第十八號ノ施行ニ關スル件）廢止ノ件

国立公文書館
National Archives of Japan

(三)戒嚴司令部令廢止ノ件

ノ三件デアリマス」

昭和十一年二月二十六日事件ニ因リマシテ治安維持ノ爲緊急ノ必要ヲ生ジマシタガ故ニ一定ノ地域ニ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ件ガ公布セラレ戒嚴司令部ガ設ケラレ東京市

内ニ於テ戒嚴司令官ハ軍隊及地方官等ヲ指揮致シマシテ戒嚴令第十四條列記ノ諸件中必要ノ件ヲ執行シ鋭意治安ノ恢復ト其ノ維持ニ努メタノデアリマス

而シテ反乱ノ鎮定ニ伴ヒマシテ表面上ノ治安ハ比較的速ニ恢復シタノデアリマスガ事件ノ

国立公文書館
National Archives of Japan

關係範圍ガ廣汎且深刻デアリマスノデ之ガ検
擧取調ニ豫想外ノ長時日ヲ要シタノデアリマス
又一般ノ治安モ表面ハ靜謐ヲ保ツテ居リマシ
タガ流言蜚語モ尠クナク人心ノ安定未ダ充
分デナク殊ニ事件直接參加者ニ對スル軍法會
議ノ公判前後ニ於テ民心ノ動搖ナキヲ保シ難

カリシト其ノ機ニ乘ジ詭激分子ノ策動ナシト
モ断ジ得サル節モアリマシタノデ本件直接參
加者ノ判決言渡前ニ緊急勅令ヲ廢スルコトハ
情勢上之ヲ許サナカツタノデアリマス
本戒嚴ノ施行ニ依リマシテ治安ヲ恢復シ其ノ
維持ヲ容易ナラシメタルハ勿論事件関係者

ノ捜査取調等ニ付テモ其ノ資スル所莫大ナモ
ノガアリマシタ而シテ其ノ執行ノ内容ハ逐次之ヲ
緩和シ漸ヲ追フテ常態ニ復歸セシムル如ク
措置シカメテ民衆ノ利益ヲ害シナイ様配慮致
シテ居リマシタ、然シナガラ斯ル戒嚴ハ情勢ノ許
ス限リ速ニ之ヲ解消スベキハ言フヲ待タザル所デアリマス

止

然ルニ其ノ後事件背後関係者ノ取調
範圍モ概ネ之ヲ悉シ関係者ハ逐次軍法會
議ニ送致シツツアル狀況ニ達シアルト共ニ一方
事件直接參加者ノ判決言渡モ既ニ之ヲ終了
シ之ニ基ク民心ノ動揺及詭激分子ノ策動
等モ特ニ認ムベキモノガナクナリマシタノデアリマス
而シテ右緊急勅令ヲ此ノ儘存續シテ置ク

関東戒嚴令（十三行全）（木村納）

コトハ仍依然トシテ之ヲ必要トスル事情ノ去ラザルニ
因ルニ非ズヤ又之ヲ必要トスル他ノ事態発生シタ
ルニ因ルモノニ非ズヤ他ノ事態発生スルノ虞ナシ
トセザルニ因ルニ非ズヤ等ノ疑念アラシメンガ為
ニ却テ社会ヲ安ナラシム増スノ虞ナシト改シマ
セズ、右ノ次第デアリマスカラ速ニ右緊急勅令ノ

ハ之ヲ、廃止スルノ緊急ノ必要ガアルノデアリマス
尤モ右勅令廃止後ノ治安維持其ノ他ニ
付キマシテハ夫々関係当局ニ於テ各般ノ施措
宜シキヲ制シマシテ革遺憾ナキヲ期スル考デ
御座イマス

樞密院ニ於ケル内閣總理大臣演說

只今御審議願ヒマスル昭和十一年勅令第十八號一定ノ地域ニ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ件廢止ノ件ニ付テ御說明申上ゲマス。

昭和十一年二月二十六日事件ノ發生ニ因リマシテ、治安ヲ維持スル爲緊急ノ必要ヲ生ジマ

国立公文書館
National Archives of Japan

シタガ故ニ、昭和十一年二月二十七日、憲法第八條第一項ニ依リ、昭和十一年勅令第十八號一定ノ地域ニ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ件ガ制定公布セラレ、之ニ基キマシテ同年勅令第十九號ヲ以テ東京市ニ戒嚴令第九條及第十四條ノ規定ガ適用セラルルコトト爲リ、又之ニ伴ヒ同年勅令第二十號ヲ

以テ戒嚴司令部ガ設置セラレ、東京市ノ警備ニ任ジ本戒嚴ノ執行ニ當ルコトト爲ツタノデアリマス。仍テ戒嚴司令官ハ軍隊及地方官等ヲ指揮致シマシテ、戒嚴令第十四條列記ノ諸件中必要ノ件等ニハ適宜執行シ、鋭意治安ノ恢復ト其ノ維持ニ努メテ參ツタノデアリマス。而シテ反亂ノ鎮定ニ伴ヒマシ

テ、表面上ノ治安ハ比較的速ニ恢復シタノデアリマスガ、事件ノ關係範圍ガ廣汎且深刻デアリマスノデ、之ガ檢擧取調ニ豫想外ノ長時日ヲ要シタノデアリマス、又一般ノ治安モ表面ハ靜謐ヲ保ッテ居リマシタガ、人心未ダ充分ニ安定セズ、其ノ間流言蜚語モ行ハレ、殊ニ事件直接參加者ニ對スル軍法會議ノ

公判前後ニ於テ人心ノ動搖ヲキヲ保シ難カリシト、其ノ機ニ乘ジ詭激分子ノ策動ナシトモ斷ジ得ザル節モアリマシタノデ、事件直接參加者ノ判決言渡前ニ右緊急勅令ヲ廢スルコトハ情勢上之ヲ許サナカツタノデアリマス。

本戒嚴ノ施行ニ依リマシテ、治安ヲ恢復シ其ノ維持ヲ容易ナ

ラシメタルハ勿論、事件關係者ノ捜査取調等ニ付テモ其ノ實スル所莫大ナモノガアリマシタ。而シテ其ノ執行ノ内容ハ逐次之ヲ緩和シ、漸ヲ追フテ常態ニ復歸セシムル如ク措置シ、力メテ民衆ノ利益ヲ害シナイ様配慮致シテ居リマシタ。然リナガラ斯カル戒嚴ハ情勢ノ許ス限リ速ニ之ヲ解止スベキハ言

(木村納)

フヲ待タザル所デアリマス。然ルニ其ノ後、事件背後關係者ノ取調範圍モ概ネ之ヲ悉シ、關係者ハ逐次軍法會議ニ送致シツツアル狀況ニ達シアルト共ニ、一方、事件直接參加者ノ判決言渡モ既ニ之ヲ終了シ、之ニ基ク人心ノ動搖及詭激分子ノ策動等モ特ニ認ムベキモノガナイノデアリマス。而シテ右緊急

国立公文書館
National Archives of Japan

勅令ヲ此ノ儘存續シテ置クコトハ、仍ホ依然トシテ之ヲ必要トスル事情ノ去ラザルニ因ルニ非ズヤ又之ヲ必要トスル他ノ事態發生シタルニ因ルモノニ非ズヤ、或ハ他ノ事態發生スルノ虞ナシトセザルニ因ルニ非ズヤ等ノ疑念アラシメ、之ガ爲ニ却ツテ社會不安ヲ增スノ虞ナシトシナイノデアリマス。右ノ

次第デアリマスカラ、速ニ右緊急勅令ハ之ヲ廢止スルノ緊急ノ必要ガアルノデアリマス。尤モ本戒嚴解止後ノ治安維持其ノ他ニ付キマシテハ、夫々關係當局ヽ於テ、各般ノ施措宜シキヲ制シマシテ、萬遺憾ナキヲ期スル考デ御座イマス。

以上申述ベマシタ樣ナ次第デアリマスカラ、事情御諒察ノ上、

速ニ御審議下サランコトヲ御願ヒ致シマス。尚幸ニ委員會ノ御審議本日ヲ以テ終了ニ相成リマスナラバ、明後日ノ定例本會議ニ上程セラレンコトヲ御願ヒ致シマス。

（木村納）

演說内容要項

一、緒言
二、「二、二六事件」發生ト本戒嚴施行顚末
三、本戒嚴ノ早期解止不可能ノ理由
四、本戒嚴ノ實效ト其ノ實施狀況（漸次緩和）
五、本戒嚴ノ解止可能時期到來ト其ノ解止ノ緊急必要性
六、本戒嚴解止后ノ措置
七、結語

一定ノ地域ニ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ件廢止緊急勅令案

朕茲ニ緊急ノ必要アリト認メ樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ帝國憲法第八條第一項ニ依リ昭和十一年勅令第十八號一定ノ地域ニ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ件廢止ノ件ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

御名　御璽

年　月　日

内閣

付箋

一定ノ地域ニ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ件廢止緊急勅令案

朕茲ニ緊急ノ必要アリト認メ樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ帝國憲法第八條第一項ニ依リ昭和十一年勅令第十八號第一定ノ地域ニ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ件廢止ノ件ヲシム

御名　御璽

年　　月

付箋

上奏勅令案

内閣總理大臣
各省大臣

勅令第　號

昭和十一年勅令第十八號ハ之ヲ廢止ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

（木村納）

理由書

昭和十一年二月二十六日事件ノ勃發ニ因リ治安維持ノ爲一定ノ地域ヲ限リ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ件ノ公布ヲ見タルモ斯ル戒嚴ハ情勢ノ許ス限リ茲ニ速ニ之ヲ解消セシムベキハ言フヲ待タザル所ニシテ今ヤ右反亂事件ノ被告人中其ノ直接關係者ニ對スル刑ノ言渡モ終リ民心略安定シ治安上ノ不安薄ラギタルヲ以テ依然其ノ施行ヲ繼續スルガ如キハ反ツテ

公安上害ナシトセザルニヨリ茲ニ之ヲ廢止セントス

（木村納）

一定ノ地域ニ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルノ件ノ施行ニ關スル件廢止勅令案

朕昭和十一年勅令第十九號昭和十一年勅令第十八號ノ施行ニ關スル件廢止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

年　月　日

内閣總理大臣

陸軍大臣

勅令案　號

昭和十一年勅令第十九號ハ之ヲ廢止ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

（木村綱）

戒嚴司令部令廢止ノ件勅令案

朕戒嚴司令部廢止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

年　月　日

内閣總理大臣

陸軍大臣

勅令第　號

戒嚴司令部令ハ之ヲ廢止ス

附則

本令ハ公布ノ日ノ翌日ヨリ之ヲ施行ス

内閣

（木村納）

昭和十一年勅令第十八號

一定ノ地域ヲ限リ別ニ勅令ノ定ムル所ニ依リ戒嚴令中必要ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

付箋（木村）

参照

内閣

昭和十一年勅令第十九號

昭和十一年勅令第十八號ニ依リ左ノ區域ニ戒嚴令第九條及第十四條ノ規定ヲ適用ス

東京市

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

(木村納)

国立公文書館
National Archives of Japan

昭和十一年勅令第二十號

第一條　戒嚴司令官ハ陸軍大將又ハ中將ヲ以テ之ニ親補シ天皇ニ直隸シ東京市ノ警備ニ任ズ

戒嚴司令官ハ其ノ任務達成ノ爲前項ノ區域内ニ在ル陸軍軍隊ヲ指揮ス

第二條　戒嚴司令官ハ軍政及

(木村納)

人事ニ關シテハ陸軍大臣ノ
區處ヲ承ク
第三條　戒嚴司令部ニ左ノ職
員ヲ置ク
參謀長
參謀
副官
管理部長
經理部長
軍醫部長
部附
部員
衛兵長
憲兵長
准士官、下士官、判任文官
第四條　參謀長ハ戒嚴司令官
ヲ輔佐シ事務整理ノ責ニ任
ズ
第五條　參謀ハ參謀長ノ指揮
ヲ承ケ各擔任ノ事務ヲ掌ル

木村納

第六條　副官ハ參謀長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ掌ル

第七條　管理部長、經理部長、軍醫部長ハ戒嚴司令官ノ命ヲ承ケ各擔任ノ事務ヲ掌理ス

第八條　部附、部員、衛兵長、憲兵長ハ各上官ノ命ヲ承ケ事務ヲ掌ル

第九條　准士官、下士官、判任文官ハ各上官ノ命ヲ承ケ事務ニ從事ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

當分ノ内東京市内ニ於ケル東京警備司令官ノ職務ハ之ヲ停止ス

(木村納)

戒嚴令（抜萃）

第九條　臨戰地境内ニ於テハ地方行政事務及ヒ司法事務ノ軍事ニ關係アル事件ヲ限リ其地ノ司令官ニ管掌ノ權ヲ委スル者トス故ニ地方官地方裁判官及ヒ檢察官ハ其戒嚴ノ布告若クハ宣告アル時ハ速カニ該司令官ニ就テ其指揮ヲ請フ可シ

第十四條　戒嚴地境内ニ於テハ司令官左ニ記列ノ諸件ヲ執行スルノ權ヲ有ス但其執行ヨリ生スル損害ハ要償スルヿヲ得ス

第一　集會若クハ新聞雜誌廣告等ノ時勢ニ妨害アリト認

（木村納）

ムル者ヲ停止スルヿ

第二　軍需ニ供ス可キ民有ノ諸物品ヲ調査シ又ハ時機ニ依リ其輸出ヲ禁止スルヿ

第三　銃砲彈藥兵器火具其他危險ニ涉ル諸物品ヲ所有スル者アル時ハ之ヲ檢査シ時機ニ依リ押收スルヿ

第四　郵信電報ヲ開緘シ出入ノ船舶及ヒ諸物品ヲ檢査シ並ニ陸海通路ヲ停止スルヿ

第五　戰狀ニ依リ止ムヲ得サル場合ニ於テハ人民ノ動產不動產ヲ破壞燬燒スルヿ

第六　合國地境內ニ於テハ晝夜ノ別ナク人民ノ家屋建造物船舶中ニ立入リ檢察スルヿ

第七　合國地境內ニ寄宿スル者アル時ハ時機ニ依リ其地ヲ退去セシムルヿ

問　緊急勅令ヲ廢止スルニハ法律又ハ緊急勅令ヲ以テスルヲ要スルヤ

答　然リ。緊急勅令ハ法律ニ代ルノ勅令ナリ、法律ニ代ルノ勅令トハ憲法第八條第二項ノ場合ヲ除ク外ハ一切法律ト同一ノ形式的及實質的效力ヲ有スルモノト解スルノ外ナシ。故ニ緊急勅令ノ廢止ハ法律又ハ緊急勅令ヲ以テスルコトヲ要スト思考ス。(而シテ此ノ理ハ緊急勅令ニ付議會ノ承諾ヲ經タル以

後ナルト其ノ以前ナルトニ依リ差異アルベキニ非ズ）

問　第一ノ緊急勅令ヲ廢止スル第二ノ緊急勅令ハ亦憲法第八條第一項ノ條件ヲ具備スルヲ要スト解釋スルヤ、

答　然リ。（註、大正十二年勅令第四百七十八號（戒嚴ノ緊急勅令廢止ノ件）ノ樞密院會議ニ於テハ數人ノ顧問官ヨリ憲法第八條第一項ノ要件欠如セルコトヲ指摘シ反對論ノ陳述アリタル處之ニ對シ政府ハ右條件ノ具備ノ要否ニ付何等言明スル所ナカリシト傳聞スルモ其ノ上諭ニ「帝國憲法第八條第一項ニ依ル旨ヲ記載スル以上之ヲ積極的ニ解釋スルノ外ナキモノト信ズ」）

問　本件ニ付憲法第八條第一項ノ條件具備シ居ルヤ、

答 具備シ居ルモノト思考ス、

按ズルニ憲法第八條ノ勅令ハ憲法第九條ノ命令ト對比シ積極的ニ公益ヲ增進スル目的ノ爲ニハ發スルコトヲ得ザルモ、消極的ニ公害ヲ防除スル目的ノ爲ニハセヲ發スルコトヲ得ルモノナリ（現狀ヲ維持スル範圍ヲ超越スルコトナシ）。尤モ各具體的場合ニ就キテ觀レバ其ノ防除セントスル公害其ノモノノ程度ニハ大小厚薄アランモ、其ノ程度ノ大小厚薄ハ要点ニ非ズシテ、防除セントスル公害ガ

現實ニ存在スルヤ否ヤガ要點ナリト思考ス。

本件ニ付テハ第一ノ緊急勅令ノ存續其ノモノガ社會不安ノ因タルコト既ニ說明セラレタル所ノ如シ、斯カル社會不安ノ因ヲ除去セントスルガ實ニ本件ノ目的タルナリ。

問 本件ニ付憲法第八條第一項ノ緊急性アリヤ。

答 然リ。緊急勅令ヲ存續シ永ク戒嚴狀態ヲ維持スルガ如キハ社會不安增大ノ因タルコト

言ヲ俟タサル所ナリ果シテ然ラバ戒嚴ノ施行及存續ヲ絶對ニ必要トシタル事由殆ント解消シタル今日ニ於テ速ニ緊急勅令ヲ廢止シ戒嚴ヲ解止スベキコトハ寔ニ緊急ノ必要事ト謂フベク之為ニ次ノ會期ヲ待ツガ如キ到底忍ビ得ベキ所ニ非ズ本件ノ措置ハ帝ニ違法ニ非ザルノミナラズ實ニ政府ノ盡スベキ當然ノ責務ナリト考フ。

問、緊急勅令ヲ廢止セズトモ、委任勅令（昭和十一年勅令第十九號）ヲ廢止スルコトニ依リ、事實上戒嚴解止ノ目的ヲ達成スルコトヲ得ベシ、果シテ然ラバ憲法第八條第一項ノ意義ニ於テハ緊急ト謂ヒ得ザルモノト考フ、政府ノ所見如何

答、本件ハ明治三十八年及大正十二年兩度ノ先例ヲ踏襲シタルモノナリ。此ノ点明ニテ御諒承ヲ乞フ。

（釋明）

緊急勅令ト委任勅令トハ不可分関係ニアルモノナリ、緊急勅令ハ二、二六事件其ノモノニ對スル臨時的特殊的立法ニシテ、恒久的一般的立法ノ性質ヲ帯ブルモノニ非ズ、緊急勅令ノ文面ニ於テハ此ノ趣旨シカク明瞭ナラズト雖モ、立法當時ノ事情ニ觀テ又立法理由ニ考ヘ疑ヲ容ルル餘地ナシ。從ツテ委任命令ノミヲ廢止シ緊急勅令ハ之ヲ存續セシメ置クト謂フガ如キコトハ是認セラレ難キ

仮リニ委任勅令ノミヲ廢止シテ緊急勅令ハ其ノ儘存續スルコトトセンカ、恐ラクハ一般社會ハ其ノ先例ト異ナルヲ思フテ、或ハ仍ホ之ヲ必要トスル事情解消セザル因ニ非ズヤ、又之ヲ必要トスル新事態發生セシニ非ズヤ新事態發生ノ虞アルニ因ルニ非ズヤ等ト疑心暗鬼ヲ生ジ社會不安ヲ增大シテ其ノ弊害ノ恐ルベキモノアルヲ憂フ。

（釋明）

緊急勅令ト委任勅令トハ不可分関係ニアルモノナリ、緊急勅令ハ二、二六事件其ノモノニ對スル臨時的特殊的立法ニシテ、恒久的一般的立法ノ性質ヲ帶ブルモノニ非ズ、緊急勅令ノ文面ニ於テハ此ノ趣旨シカク明瞭ナラズト雖モ、立法當時ノ事情ニ觀テ又立法理由ニ考ヘ疑ヲ容ルル餘地ナシ。從ツテ委任命令ノミヲ廢止シ緊急勅令ハ之ヲ存續セシメ置クト謂フガ如キコトハ是認セラレ難キ所ナリト思惟ス。緊急勅令ヲ廢止スベキコトガ正當ノ措置ナリト信ズ。

（註）戒嚴狀態ハ緊急勅令ヲ以テ已ニ宣言サレ居ルモノト觀テ可ナルベク、委任勅令ハ單ニ戒嚴ノ内容ヲ規定スルニ過ギズ即チ事情ノ推移ニ順應シテ場所的ニ又事項的ニ適切ナル戒嚴ノ實施ヲ爲シ得ル樣斯ル立法形式ニ依リタルモノト思考ス。

問、第一ノ緊急勅令ヲ廢止シタル第二ノ緊急勅令ハ之ヲ議會ニ提出スルヤ

答、類似ノ先例ヲ踏襲シテ議會ニ提出セザル見込ナリ。按ズルニ緊急勅令ヲ議會ニ提出スルハ緊急勅令ヲ將來ニ向ツテ有效ニ存續スル必要アル場合ニ限ル、然ルニ本件ノ場合ノ如ク第二ノ緊急勅令ハ第一ノ緊急勅令ヲ廢止シタル瞬間ニ於テ其ノ目的ヲ完了シタルモノナレバ將來ニ向ツテ其ノ效力ヲ存續セシムベキヤ否ヤヲ決スルノ餘地ナキモノト思考ス

類似ノ先例トシテハ明治三十八年勅令第二百四十二號及大正十二年勅令第四百七十八號（何レモ戒嚴解止ニ關スルモノ）並ニ明治四十二年勅令第二百三十五號（明治三十九年法律第五十六號韓國ニ於ケル裁判

事務ニ關スル件ヲ明治四十二年十月三十一日限リ廢止シタルモノナリ）

（註）

政府ハ明治四十二年勅令第二百三十五號ヲ以テ明治三十九年法律第五十六號ヲ廢止シ、而カモ該緊急勅令ヲ議會ニ提出セザリキ、其ノ趣旨ハ蓋シ廢止セラレタル法律ハ絶對廢止（效力停止ニ非ズ）ト解シ而シテ緊急勅令ハ法律廢止ヲ内容トスル處分的ノモノナルガ故ニ其ノ目的完了ニ因リ實質的ニ死滅シ從ツテ其ノ效

力ヲ將來ニ向ツテ存續セシムト言フ觀念存シ得ズト思考シタルモノト信ズ

問　明治二十七年勅令第六十七號ノ緊急勅令ハ議會ノ承諾ヲ得タルモノナルガ、該緊急勅令ヲ廢止シタル明治三十七年勅令第十九號ノ緊急勅令ハ之ヲ議會ニ提出シタリ、其ノ取扱上ノ差異如何

答　引例ノ場合ト本件トハ其ノ性質異レリ。引例ノ第二ノ緊急勅令ハ第一ノ緊急勅令廢止ノ外ニ他ノ内容ヲ包含ス即チ第一ノ緊急勅令ヲ廢止スル（同令附則第二項ヲ以テス）ト共ニ新ニ之ニ代ハルベキ諸條規ヲ規定シ居ルモノニシテ其ノ實質ハ第一ノ緊急勅令ヲ變更スル新立法タリシ、故ニ之ヲ以テ本件ノ反對ノ先例ト爲スニ足ラザルモノト思考ス。

問　第一ノ緊急勅令ヲ廢止シタル第二ノ緊急勅令ガ議會ニ於テ不承諾ナル場合第一ノ緊

急勅令ハ復活スルカ、

答　從來ノ先例ヲ踏襲スル限リハカヽル問題ヲ生ズル餘地ナシ。

假定ノ論トシテ、私見ヲ述ブレバ緊急勅令ノ失效ハ既往ニ遡ルモノニ非ザルコト憲法第八條第二項ノ明示スル所ナリ、從ツテ第二ノ緊急勅令ガ效力ヲ失フモ第一ノ緊急勅令ガ其ノ效力ヲ復活スル理ナシ。若シ第一ノ緊急勅令ガ廢止セラレタルニ非ズシテ其ノ效力ヲ停止セラレタルモノナルトキハ復活スルコト當然ナリト思考ス（此ノ見解ハ明治四十二年勅令第二百三十五號ニ付政府ノ執リタル見解ナルガ如シ但シ明治四十三年ニ内閣總理大臣桂太郎ノ名ヲ以テ花井卓藏君提出質問書ニ答ヘタル答辯書ニ於テ直接此ノ点ニ觸レザル樣言葉ヲ用ヒタリ）

書記官長ヲ

書記官稲垣

十一年二月二十七日

内閣書記官長

守衛隊司令官宛

爾今内閣（宮城内廳舍及宮城外假廳舍）ニ登廳スル者ハ別紙證明書ヲ所持致候條宮城平河門又ハ行幸道路口ノ通行方市許可相

二月二十七日施行
昭和五十二年二月二十七日廢止

国立公文書館
National Archives of Japan